

## 医療・福祉における芸術療法プロジェクト（最終回）

沖野 成紀<sup>\*1</sup>・磯部 二郎<sup>\*1</sup>・近藤 真由<sup>\*2</sup>  
堀 真奈美<sup>\*3</sup>・渡辺 哲生<sup>\*4</sup>

### はじめに

「医療・福祉における芸術療法」プロジェクトは<sup>1)</sup>、SOHUM 計画当初からあったプロジェクトの1つであるが、直接の前身プロジェクトがなかったため開講まで慎重を期し、ようやく2011年度秋学期にその1回目の「人間学1」を開講した。担当教員には、計画当初からのリーダー、沖野、リーダー代行の磯部、音楽療法が専門の近藤（以上音楽学課程）の他、他学科他課程からは、写真が専門の渡辺（デザイン学課程）、医療制度が専門の堀（社会環境課程）が加わった<sup>2)</sup>。

これを受け、「人間学2」は、2012年度の夏期集中授業として初めて開講された。履修者はたった1人であったが、翌2013年度は4名の学生が履修してくれ、まずまずの滑り出しと思われた。ところが、2014年度は一転、履修者が0となってしまった。プロジェクト存亡の危機と思われたが、翌2015、2016年度と2年連続、デザイン学課程から2名ずつが履修してくれ、それまで音楽療法ベースだったのに対して造形芸術的要素を取り入れたセッションを行うことができた<sup>3)</sup>。

さて、2017年はどうだったか。残念ながら履修者はまた0となってしまった。ただし、履修希望者は音楽学課程に数名いた。しかしながら、希望者の話を聞いてみると「人間学1」は別のプロジェクトで受けたとのことだったので、原則通り履修を断った。

かくして今回の報告も秋学期の「人間学1」の報告のみとなるはずであったが、その後プロジェクト・メンバーの1人、堀が、翌2018年度より教養学部を離れることが確実となった。折しも、教養学部内ではSOHUMプロジェクトの再編制が検討され始めた。以上のような状況を踏まえ、メンバー間で話し合った結果、本SOHUMプロジェクト「医療・福祉における芸術療法」は2017年度をもって終了する運びとなり、SOHUM運営委員会においてもその旨了承された。

---

受理日2018年11月28日

\*1 教養学部芸術学科音楽学課程教授 \*2 教養学部芸術学科音楽学課程准教授

\*3 教養学部人間環境学科社会環境課程教授（現・健康学部長） \*4 教養学部芸術学科音デザイン学課程教授

したがって、本稿が最後の報告となる。前半で秋学期に開講された「人間学1」について報告した後、後半では、芸術療法プロジェクト7年間の歩みを総括したい。

## 1 秋学期講義「人間学1」

授業計画は2017年度も、直近の4年間と同様<sup>4)</sup>、「概論→制度論→実践論」という理想的な流れから「概論→(実践論)→制度論→(実践論)」とせざるをえなかった。また、その他の点も含めて、昨年度と全く同じ構成であった。

9月27日	ガイダンス	沖野
10月4, 11日	芸術療法概論(1)(2)	磯部
10月18日	〃 〃 (3)と小レポート(1)	〃
10月25, 11月8日	造形芸術の臨床的応用(1)(2)	渡辺
11月15日	〃 〃 (3)と小レポート(2)	〃
11月22, 29日	医療と福祉の制度(1)(2)	堀
12月6日	〃 〃 (3)と小レポート(3)	〃
12月13, 20日	音楽療法(1)(2)	近藤
1月10日	音楽療法(3)と小レポート(4)	近藤
1月17日	まとめと人間学2へのガイダンス	沖野
1月24日	課題テーマに対するレポート	〃

成績は、例年と同様、主として4回の小レポートと最後の「課題テーマに対するレポート」を基につけられた。小レポートの課題は、それぞれ、芸術療法の歴史と概要に関する講義のまとめ、「写真撮影行為による外界の理解～私のTopos」をテーマに1枚の写真プリントの提出、芸術療法に公的保険を適用すべきかどうか、音楽を使って療法をする意味と可能性、であった。最終レポートの課題テーマは、「具体的な対象者を想定した上で、そこで実施する芸術療法セッション計画を、具体的に考えなさい」であった。

履修者による授業についてのアンケートの中で、総合評価の本科目平均値は、2012年度から3.97→4.24→4.27→4.34と順調に上がって来ていたが、残念ながら2016年度からは4.29→4.26と下降傾向となった。特に最終年度は、既に授業の半ばで、「芸術療法プロジェクトは今年度で最後となり、本科目『人間学1』を受けるはずの『人間学2』ももう開講されない」旨アナウンス済みだったので、学生・教員含めた全体の士気が低下したのは否めない。

教員による成績評価の平均GPAは、「/」評価(授業放棄者等)を除いて、2012年度から2.53(49名)→2.59(22名)→2.35(26名)→2.35(34名)と相対的に低レベルでの横這いの中、2016年度3.04(24名)と急上昇したが、最後はまた2.63(30名)と落ち着いた。それでも、過去2番目に高い数値である。

## 2 芸術療法プロジェクトの7年間

他のプロジェクトと比較した場合、芸術療法プロジェクトの第1の特徴は、良くも悪くも、その小規模さにあったと言える。どの教員も自ゼミ生を勧誘したり動員したりすることはなかった。選択科目である「人間学2」は基本的に少人数で、しばしば開店休業になるほどであった。ただし、履修希望者が皆無という訳ではなく、「人間学1」を芸術療法プロジェクトで修得した者のみ履修可という原則を貫いたためであった。そしてそれは、病院や施設等の現場に出るためには、最低限踏まえねばならないことを予め学んでもらう必要があったからである。

人間学2の履修者が少人であったとはいえ、このような条件をクリアしてきた学生だったので当然そのモチベーションは高く、われわれ教員がしばしば目を見張るほどのアイデアとその実現に向けての遂行力を示してくれた。そのような学生を、指導と言うよりはむしろサポートし、最終的には一緒になって現場に赴き、セッションを遂行し、クライアントの方々とも交流する中で、われわれ教員にも多くの気付きと発見があり、それは教師冥利に尽きる貴重な体験となった。

また、小規模に加えてフィールドが近場であったため、SOHUM 予算も殆ど必要とせず、途中からは予算枠を放棄したほどである<sup>5)</sup>。もちろん、教員の人件費等は別にかかっているため、履修生数が担当教員数より少ないのは非効率だという批判もあるかもしれない。実際、音楽学課程で音楽療法を専攻する学生たちを動員して、それに他学科の学生を絡ませ、大々的にやる道も考えられた。しかしながら、それならば人間学2も必修科目にすべきであって、選択科目にした以上、履修するしないは学生達の自由意志に任せるべきと考える。人間学2は、SOHUM 発足当初から諸般の事情で選択科目にせざるをえなかったため、ある意味当然の帰結と言ってよい。

第2に、「芸術療法」の内容については、基本的に音楽療法ベースであったという点である。当プロジェクトの計画段階からして、音楽学課程で積み上げてきた音楽療法の人的物的リソースを利用して始めようとのことだったのでこれまた当然の帰結であるが、「芸術療法」と名乗るからにはやはり造形的な要素が不可欠である。それで、当初からデザイン学課程の渡辺が加わった次第で、事実この7年間後半の人間学2では、デザイン学課程の学生が履修し活躍してくれて、漸く芸術療法らしくなってきたところであった。

しかしながら、「芸術療法」と言うと、各専門家の定義はともかく、一般的なイメージとしては絵画療法などの美術系が中心的な位置を占めよう<sup>6)</sup>。その点、惜しむらくは、当芸術学科に美術学課程がありながら、美術学課程からの教員参加が終になかったことである。もちろん、リーダーの沖野は、プロジェクト計画時に美術学課程教員にも働きかけたのであるが、これまた諸般の事情で諦めざるをえなかった。

最後に、医療・福祉における芸術療法プロジェクト、この7年間で一言でまとめると、大規模な派手な活動こそなかったが、少数による密度の高い活動によって、SOHUM の中でもそれ

なりのアピールができたと思われる。例えば、市の広報誌等でも評価され<sup>7)</sup>、また実は、当サイトをみた看護系の学校関係者から、芸術療法に関する非常勤講師依頼の問い合わせまであった。

芸術療法プロジェクトはこれで終わるが、SOHUMにおけるその歴史的使命は、十分果たせたものと信ずる。東海大学の芸術学が続く限り、また機会があれば、芸術療法に再チャレンジしてみたいと思う。

## 註

- 1) 今までの報告では、プロジェクトそのものの趣旨は東海大学教養学部のサイトにあるとして (<http://www.shc.u-tokai.ac.jp/prj/> 医療・福祉における芸術療法プロジェクト-2, 最終確認日 2018/10/5), 掲載を省略して来たが、今後「揮発性情報」化する可能性もあるので、以下に全文を転載しておく。

医療・福祉における芸術療法プロジェクト

### 【プロジェクト趣旨】

現代社会において医療・福祉の問題は常に社会的な話題となり、現代を生きる人々にとって日常生活の関心事の一つになっています。医療技術が高度化したことによる延命治療の問題、また高齢化社会の進展とともに発生する介護問題などは、誰にとっても関心の高い課題となっています。そして療養者や高齢者のみならず若者や子どもの間にも、うつ病などの心の病を持つ人々が増え続けています。そこには医学や法律の制定、政策の実施だけでは解決しにくい精神的な問題に対処する取組みが求められているようです。

東海大学教養学部では十数年前より芸術学科音楽学課程において音楽療法コースを開設しながら、医療と音楽のあり方を探り、音楽療法による教育プログラムを育ててきました。また最近ではデザイン学課程の取組みにおいても、高齢者をテーマとした玩具開発プロジェクトを実施しており、芸術を核とした実践的教育プログラムの機運が高まりつつあります。

国内では海外に比べて芸術療法が未だ認知されていないともいわれる一方、現代社会においてめまぐるしく変化する現代人の病には芸術療法が求められているようです。芸術療法は、作品を創作する「造形的療法」、役割を演じる「演劇的療法」、媒体と融合する「仮想的療法」、音や声を利用する「音楽的療法」の4つに分類されますが、それぞれはクリエイティビティ溢れる創造的行為であり、心の悩みや葛藤を打ち払い、人間関係を築くのにも有効な療法であると考えられています。この「医療・福祉における芸術療法プロジェクト」では、このような芸術療法をテーマに、療養者や高齢者に限ることなく、現代社会において心に迷いを持つ様々な立場の人に求められる芸術のあり方を探る目的から、病院や福祉施設などをフィールドとした実践型教育プロジェクトを通して、医療・福祉現場における課題や問題点を整理しつつ、音楽・美術・デザインといった芸術の果たすべき役割・価値を実践的に研究、検証していくことをめざしています。よってこのプロジェクト履修においては、芸術学科の学生のみならず、医療や福祉に興味のある社会環境課程の学生などにも積極的に参加してもらいたいと考えています。

### 【研究キーワード】

芸術療法／音楽療法／アートセラピー／高齢者研究／エンターテイメントデザイン／医療空間計画／福祉計画／他

【主な担当教員】(担当者は平成21年度申請時のもの)

堀真奈美 (人間環境学科社会環境課程 教授)

沖野成紀 (芸術学科音楽学課程 教授)

渡辺哲生 (芸術学科デザイン学課程 教授)

**【募集学生定員数】**

20名程度

**【SOHUM 領域科目】**

自然環境（環境倫理，環境芸術論）

社会環境（社会福祉概論，地域福祉論，障害者福祉論，データ分析）

音楽学（音楽療法概論，医学概論，実験美学，臨床心理学）

美術学（芸術哲学，芸術学）

デザイン学（ユニバーサルデザイン論，エンターテインメントデザイン論，映像デザイン論，色彩学）

国際（ジェンダー論，国際文化交流論）

- 2) さらには，箱庭療法が専門の1つである体育学部の吉川政夫（現）名誉教授にも，2015年度まで箱庭の実習授業を1コマお願いしていた。最後に改めて御礼申し上げる。
- 3) ここまでの経緯については，今までの報告書を参照のこと。沖野成紀，磯部二郎，近藤真由，堀真奈美，渡辺哲生「SOHUM『医療・福祉における芸術療法』プロジェクト」（『東海大学紀要 - 教養学部』45輯，2014年，423-426頁），同「医療・福祉における芸術療法プロジェクト」（『東海大学紀要 - 教養学部』46輯，2015年，295-297頁），同「医療・福祉における芸術療法プロジェクト」（『東海大学紀要 - 教養学部』47輯，2016年，381-385頁），同「医療・福祉における芸術療法プロジェクト」（『東海大学紀要 - 教養学部』48輯，2017年，377-381頁）。
- 4) 沖野他，前掲書を参照のこと。
- 5) 沖野他，前掲書，特に2014を参照のこと。
- 6) 例えば，日本芸術療法学会のサイトには次のような学会目的が掲げられている。「本学会は，絵画，詩歌，音楽，ダンス，心理劇等々の芸術活動を介して心身の治療を行う芸術療法を中核として，その諸領域の学術研究の進展と専門的治療技術の普及・充実を図ることを目的としている」（<http://jspea.org/outline/index.html>，最終確認日2018/10/28）。ここで第1に挙げられている芸術ジャンルは絵画であり（美術ですらない），音楽は3番目である。
- 7) 沖野他，前掲書，特に2013を参照のこと。